

天の瞳

幼年編Ⅰ

灰谷健次郎

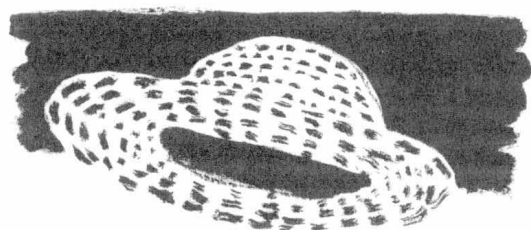


角川書店

灰谷健次郎

天の瞳

幼年編Ⅰ



角川書店

天の瞳 幼年編Ⅰ

平成十年二月二十七日 初版発行

著 者——灰谷健次郎

発行者——角川歴彦

発行所——角川書店

東京都千代田区富士見二一三三

〒一〇二一八一七七

振替〇〇一三〇九一九五二〇八

電話／営業部〇三三三三八八五二一

編集部〇三三三三八八四五一



印刷所——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部サービスセンター宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Kenjiro HAITANI 1998 Printed in Japan
ISBN4-04-873096-7 C0093

天
の
瞳

幼年編
I

装画・挿絵
装丁

坪谷令子
角川書店装丁室

「倫太郎ちゃんか……」

ヒデミ先生は息せき切っている。

「また、あいつか」

あんちゃんほうんざりした顔つきになった。

「どんなにいつても木から下りてこないの。助けて」

保育園はまだ開設されていないのだが、園長に就任することになっている園子さんの自宅を開放して、八名の園児を預っている。そのうちの一人が倫太郎だ。

その日、園子さんの家から二百メートルも離れていない白鷺山しろさぎやままで園外保育に出かけた。山といても丘おかくらいの高さで、登りきったところに一本松が立っている。斜面しゃめんに、ほどよい長さの草が生えていて、そこが子どもたちの遊び場だった。

ビニールシートを尻しりに敷いて、緑の斜面をいつきにすべる。子どもたちのお気に入りの遊びである。

帰る時刻が近づいて、もうひとりの園の先生であるシノブ先生が

「もう帰りますよう」といった。

倫太郎が

「もうひとつウ」とねだった。

「だめ、だめ。みんな整列。はい。小さく前へならえ」

倫太郎だけ並ばなかった。

「早く並ばなきゃだめじゃないの」

シノブ先生が叱った。

「ぼく帰らないもーん」

倫太郎は口を尖らせた。

「もうひとつやらせてくれないと、ぼく帰らないもーん」

「そんな無理をいうのなら、あなた、ここにひとりでいなさい」

「いいもん」

倫太郎はまるで動じていなかった。

「みな行こね。倫太郎ちゃんはいいつも先生のいうことをきかないもんね」

しばらく歩いて、倫太郎の視野からはずれたと思われる所へくると、シノブ先生は子どもたちをしゃがませた。

そして、シノブ先生は倫太郎の偵察に出かけたのだが、もうそこで勝負がついていた。倫太郎の方が一枚上手だった。

倫太郎はすでに一本松に上っていて、逆にみんなの動きを見通していた。

「あほ、あほシノブ。シノブのブブー。ブ、ブ、ブッ」

うろろう倫太郎を探すシノブ先生の頭の上から、倫太郎の声が降ってきた。

「もおう……」

倫太郎はシノブ先生めがけて、唾^{つば}をじゅうと吐^はきかけた。

「倫太郎！ 下りてこい」

やってきたあんちゃんは大声で怒鳴^{どな}った。

「こら！ 下りてこい」

あんちゃんは園子さんの弟で、プロボクサーだったが、止めて園を手伝うことになっている。あんちゃんはヒデミ先生やシノブ先生と違って教育的配慮^{はいりよ}というのが少ないから、三歳、四歳の子どもに対してもけっこう乱暴である。

倫太郎はそのところをちゃんと心得ていて、あんちゃんには女先生と同じ態度はとらない。

「下りないもーん、ねえー」

木の枝に抱^だきついて倫太郎は憎々^{にくにく}しげに下^{くだ}のあんちゃんにいった。

こっちは見下ろしていて、向こうは見上げている。見上げながら怒^{おど}っていても少しも怖^{こわ}くない。そんな余裕^{よゆう}が倫太郎にはあった。

あんちゃんはカリカリした。

「下りてこんのやったら、こっちから上って行くぞ！」

「来てみイ、来てみイ」

木は天まで伸^のびている。いくらでも上っていけばいい。倫太郎はそんな気持ちがあるのである。あんちゃんの辛抱^{しんぼう}が切れた。

枝をつかんで、ぐいっと体を幹に移した。

どどつとあんちゃんの姿がせまってくる。それが倫太郎の目に映った。

大人の男おとなつてすごい。一瞬じしゆん、倫太郎はひるんだが、あつというまに二つ、三つ、上の枝に身を飛ばしていた。

「ああ、だめ。達郎さんだめえ」

ヒデミ先生が悲鳴を上げた。

細い枝が折れて倫太郎がまっさかさまに落ちてくる。ヒデミ先生はそんな光景を想像したのだ。
つた。

「はよ降りい」

倫太郎は勝ったつもりでいる。

「よし、わかった。オレはもう下りる」

あんちゃんはあっさりいった。

ちよつと拍子ひょうしゆ抜けしたが、それでも倫太郎は気を緩ゆるめなかった。

あんちゃんが木の枝一つ分を下りると、用心深く、倫太郎もその分だけ下りた。

（あいつ、動物的感觉ちゆうぶのかんかくちゅうのがあるな）

あんちゃんは元ボクサーだけあって、倫太郎のそんなところに舌したを巻いた。

あんちゃんは下りながら計算していた。一番太い枝に土台を決めて、そこにしつかり左足を下ろした。体を沈しずめて、さらに下の方へ下りていく振りふりをしながら、さつと向きを変えた。伸び上がって、倫太郎の右足をがっしりつかんでいた。

「わあっ」

あんちゃんは倫太郎が落下してもいいように右手を大きく突つき出し、そして広げた。

倫太郎は木の枝をしつかりつかんで、自分の体を支えた。その力は、大人が引きずり下ろそうとしても容易でないことが、あんちゃんにじきわかった。

あんちゃんは指ごと引っぱがそうと倫太郎に近づいた。

倫太郎はあんちゃんの胸の内を読んだ。やにわに上つぱりのすそをぐるりと木に巻きつけ、その端をしつかり歯でかんだ。指をはがされても、まだ抵抗するぞという気構えである。

倫太郎は顔を真つ赤にして、あんちゃんをにらんだ。

「おまえという奴は……」

あんちゃんは絶句した。

「……なんちゆう奴や」

あんちゃんは完全に倫太郎の勢いに押された。倫太郎を力ずくで木から下ろすことをあきらめた。

少し下に下りて、あんちゃんはいった。

「どうせえちゆうんじゃ」

倫太郎はかんでいた上つぱりをはなしていった。

「だました。だましたやろ」

何が……といいながら、あんちゃんは考えた。下りる振りをしながら彼の足をつかんだことをいっているらしい。

「あほたれ。だましたんやないわい。作戦や、あれは。おまえはそれにはまりよったんや。おまえの負けや」

まだ負けてえへんと倫太郎は一人前な口を利いた。

「こうなったら持久戦や。いつまでもその木に上つとれ」

あんちゃんは木から下りた。

「倫太郎ちゃん、お願いだから下りてきて」

ヒデミ先生は木の下で哀願あいがんした。

「あかん」

にべもない倫太郎の返事だった。

他の園児たちはシノブ先生に連れられて、とうに山を下りてしまっていた。

あんちゃんがいった。

「おまえが下りてくるまで、ここで待つとるワ」

「下りていけへん」

「ええの、ええの。おまえも人間の子オやから、シヨンベンもしたくなるやろし、腹も減るやろ」

「オシッコはここでするわい。かけたるぞオ」

「どうなとさらせ」

あんちゃんは木のそばにすわりこんだ。

「倫太郎ちゃん、先生を困らせないで」

完全にお手上げのヒデミ先生は弱々しくいった。

夕暮れ近くになっても倫太郎は木から下りようとしなかった。

「根性あるワ。あのガキ」

あんちゃんは草っぱらに寝ころんで、こちらもなかばやけくそ気味で、意地の張り合いを続け



た。

「達郎さん」

「なんや」

「わたし、わからないわ」

「なにがや」

「倫太郎ちゃんみたいなにどう添^そうてあげたらええの」

「おまえ、保育の専門学校を出たんやろ。そんなことこつちがききたいワ」

ヒデミ先生は新卒で、まだ二十歳だ。あんちゃんと二つ違いになる。

「けど……、おまえ、さつきええこというたな」

「なに？」

「倫太郎にどう添^そうてあげたらいいんやと確かそういうたやろ」

「ええ」

「その言い方、オレ気に入^{はい}った。なんかぬくい感じがする」

ヒデミ先生は少し微笑^{ほほえ}んだ。

「専門学校にひとりだけ好きな先生がいたの。達郎さんみたいに言葉づかいは乱暴^{らんぼう}だったけど…

…

「それ、余分や」

「あんちゃんはいった。」

「実^{じつ}のあるやさしい先生よ。その先生が、子どもを教えるとか、しつけるとか、そんな傲慢^{ごうまん}なことをいうなつて。子どもには添^そうてやれつて教えてくれたの。二十人の子がいたら二十通りの添^そ

い方がある。それを考えるのが保母の仕事だつて」

「そいつ、ええこというなあ」

感じ入つたようにあんちゃんはいった。

「センコと名のつく奴に、ろくな奴はおらんけど、なかには、ましなのもおるんやなあ」

あんちゃんらしい言い方をした。

そのとき、松葉がばらばら降つてきた。見上げると倫太郎が葉をちぎつては、ふたりめがけて投げてゐる。

「おまえ、妬^やいとんのか」

あんちゃんがいった。

「あほ」

と倫太郎が返した。

あんちゃんはむっくり体を起こした。

「おい。倫太郎」

「あほ」

倫太郎がまた怒鳴つた。とり合わないで、あんちゃんはいった。

「おまえにきいてやらなあかん段階ちゅうもんがあるということを忘れとつた……おまえがごねとるその言い分つてなんやねん」

ヒデミ先生が横から口をはさんだ。

「よく説明しなくてごめんなさい。すべりっこをもう一回させて。もう一回やらせてくれな
いと帰らないって、いったと思うわ」

あんちゃんは倫太郎にいった。

「わかった。わかったから、下りてこい」
倫太郎が怒鳴った。

「つかまえるんやろ」

「そんなきたない手は使わん。オレがおしまいまでつき合つた。けど、ほんとうにもう一回だけやぞ。ええか」

それをきいて、木の上の倫太郎はにたと笑った。木から下りてくるときの倫太郎はただの幼児だった。怖そうにそろそろと下りてくる。

「おまえ、気合だけで生きとるような奴やなあ」

あんちゃんがつくづく……という感じでつぶやいた。

おしまいのひとつをすべて倫太郎はきげんを直した。

「あんちゃんはすぐ怒るう……」

鼻歌でもうたうように倫太郎はいうのである。

「あんちゃんはすぐ怒るう……」

そういいながら倫太郎はもうあんちゃんの手を握にぎっている。

「おまえには負けるワ」

ヒデミ先生が横でいった。

「なんでこんなかわいい顔するの。この子」

「神サンになんかもちや、倫太郎は」

と、あんちゃんはいった。

倫太郎が木から下りると、待っていたかのようにカラスが一羽、松の木のとっぺんに止まった。倫太郎の一日はまだ終わらなかった。

ため池のそばを通っていたとき、倫太郎は大声をあげた。

「亀や！」

「なんや、欲しいんか」

「うん」

亀は人の足音をきいて、ごそごそ深みに入って行こうとした。

「あかん。深いとこへ行つてしもた」

待つとれ、とあんちゃんはいって、靴のまま水の中へ入った。

亀を一匹つかまえてきて、倫太郎の手に持たせた。

倫太郎の目は、亀の方に向けられていなかった。

「なんや、どないしたんや」

倫太郎は小さな声でいった。

「あんちゃんの靴、濡れてしもた」

あんちゃんの靴、濡れてしもたと、あんちゃんの足元を見ながら、もう一度、倫太郎はいった。

保育園開設前の出来事である。

その年の四月、新しい保育園は開設された。倫勸保育園と名がつけられた。園子さんとあんちゃんりんえいの父源太郎の命名である。

「こんなむずかしいのはあかん。風の子保育園とかなんとか、もっとわかりやすい名があるやろ

に」

あんちゃんが文句をつけたが、園子さんは笑って答えなかった。

園舎はコンクリートのうちつばなしで、なんの絵が描かれているでもなく、なんの飾りもなく、およそ幼児の学ぶ建造物らしからぬ体裁だった。

「石と土と木の素朴さがいいの。なんにもしない方がいいの。この園舎に絵を描くのも、部屋や廊下を飾るのも子どもでしょ。大人のおせっかいはいらないわ」

園子さんはそういうのである。

保母七名、それに園長の園子さんと下働き兼運転手兼助手のあんちゃん、総勢九名だった。三歳児から下は次年度から受け入れることになっていた。

竣工式を兼ねた開園式は、スタッフと、園児と親だけの、議員さんやエライさんの祝辞ひとつ朗読されない簡潔なものだった。保育園の姿勢が、よく表されていた。

居住まいを正した源太郎が、にこりともしないですわっているのが印象的だった。

源太郎は保育園の金主である。自分の子どもに財産は残さないというのが信条で、源太郎の汗の結晶は子どもたちの手によつて社会に還元されたことになる。

満足だったのだろうか、始終、苦虫をかみつぶしたような顔をしていたので、とりようによつては、ああ損をしたと思つているとも受けとれた。

式の終わつた後、あんちゃんがそんな意味のことをいって親をからかった。

源太郎は一喝した。

「馬鹿もん。損はおまえたちだけでじゅうぶんじゃ。ろくでもない子オを持つて、世間さまに申し訳がたたんと思つておる親の身になつてみる。この園はおまえたちの罪滅ぼしの場所じゃ」